

世界文学に現われた女性像

島田良二編

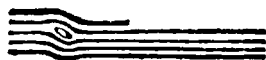
笠間書院 95



世界文学に現われた女性像

島田良二編

笠間選書 95



笠間書院

島田良二
千葉市稲毛台町 16-18

鵜木奎治郎
千葉市幸町 1-5-2棟 402

安藤幸輔
市川市東菅野 3-2-16

木下豊房
船橋市金杉町 1317-16

橋口守人
市川市真間 3-8-1

山内正平
千葉市都賀の台 4-27-11

南田正児
船橋市丸山 3-34-16

黒須重彦
東京都葛飾区東金町 2-24-10-1

笠間選書 95 世界文学に現われた女性像
昭和 53 年 4 月 30 日初版第 1 刷発行
定価 1,500円 一検印省略一

著者 代表 島田良二©
発行者 池田猛雄
印刷 科学図書印刷株式会社
製本 手塚製本所
発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46
電話03-295-1331 (代) 振替東京 1-56002

書籍コード 1391-953095-0924

はじめに

文学に現われた女性像を考えようというのであるが、こうした試みは本書が初めてというのではなく、いくつかの類書があるようである。作品に登場する女主人公の生き方を通して、その時代と社会を考えることは、文学作品の理解と鑑賞のためには、効果的な方法であるという認識からであろう。

ここでは世界各国の文学作品から四十五編を選び、そこに登場する女性たちの愛と生活を中心に考えようとした。無数といていいものの中からの限られた作品の撰択は、執筆者の考えに委ねられている。一応の基準として、近代以降の文学作品を対象とはしたが、必ずしもそれに拘束されるわけではない。また、アプローチの方法も執筆者の自由となっている。本書の内容が極めてユニークで興味ぶかいものとなった所以である。だが、そこには自ら一筋を貫くものがあることも確かである。

本書の執筆者は、千葉大学教養部において「世界文学に現われた女性像」を分担講義したものであり、女主人公を通して総合的に世界文学を考えようとする立場で一致している。ここに収めたものは、講義ノートをふまえて、新たに本書のために書下ろしたものである。学生諸君の参考書として、また広く一般読者の文学理解のための一助となれば幸いである。

昭和五十三年三月

『世界文学に現われた女性像』 目次

はじめに

I 日 本

1 概 観 2

2 井原西鶴『五人女』のお夏・おせん 8

3 近松門左衛門『曾根崎心中』のお初 14

4 森鷗外『舞姫』のエリス 20

5 樋口一葉『十三夜』の阿閑 26

6 泉鏡花『高野聖』の女 32

7 島崎藤村『ある女の生涯』のおげん 38

8 有島武郎『或る女』の葉子 45

9 芥川龍之介『藪の中』の真砂 51

10 葉山嘉樹『淫売婦』の女 57

11 丹羽文雄『厭がらせの年齢』のうめ女 63

12 伊藤整『火の鳥』のエミ 69

13 太宰治『ヴィヨンの妻』の私 75

14 田村泰次郎『肉体の門』の女たち 81

15 井上靖『狐銃』の彩子 87

- 16 大岡昇平『武蔵野夫人』の道子 93
 17 庄野潤三『プールサイド小景』の青木夫人

99

II フランス

1 概観

106

2 スタンダール『赤と黒』のレナール夫人

112

3 バルザック『谷間の百合』のモールソー夫人

118

4 メリメ『カルメン』のカルメン

124

5 フローベール『ボヴァリー夫人』のボヴァリー

130

6 モーパッサン『女の一生』のジャンヌ

136

III イギリス

1 概観

144

2 デフォール『モル・フランダーズ』のモル

151

3 サッカレー『虚栄の市』のベッキ

157

4 E・ブロンテ『嵐ヶ丘』のキャスリン

163

5 ハーディ『ダーバーヴィル家のテス』のテス

168

6 ローレンス『チャタレー夫人の恋人』のコニー

174

IV アメリカ

1 概観

182

2 H・ジェイムズ『ワシントン広場』のキャサリン

188

V

ロシア

- 3 E・ディキンソン『詩集』の私 194
 4 アンダスン『ワインズバーグ・オハイオ』のエリザベス 201
 5 マッカラーズ『心は孤独な狩人』のミック 207
 6 T・ウイリアムズ『ガラスの動物園』のローラ及び
 F・オコナー『善良な田舎者』のハルガ 213

VI

ドイツ

- 1 概観 222
 2 プーシキン『エウゲニー・オネーギン』のタチャーナ 229
 3 ドストエフスキー『罪と罰』のソーニヤ 235
 4 トルストイ『アンナ・カレーニナ』のアンナ 242
 5 チェーホフ『犬を連れた奥さん』のアンナ 248
 6 チェルスイシェフスキー『何をなすべきか』のヴェーラ 254
 1 概観 262
 2 クライスト『聖ドミンゴ島の婚約』のトーニー 268
 3 ブレンターノ『健気なカスペルルと美しいアンネルルの物語』の老婆アンネ 274
 4 ハイゼ『ララビアータ』のラウレラ 280
 5 シュニッツラー『ギリシャの踊り子』のマテイルデ 286
 6 ハインリヒ・マン『ある愛の物語』のアリス 292

VII 中国

1 概観

300

2 劉向『列女伝』の夏桀末喜と殷紂姐己

308

3 司馬遷『史記』の呂后

313

4 白居易『長恨歌』の楊貴妃

319

5 笑笑生『金瓶梅』の潘金蓮

326

世界文学に現われた女性像 I 日 本

安 藤 幸 輔

概観

明治以降のいわゆる近代文学に登場する女性は、その境遇や生きかたは多様であるが、おのずから共通する一つの特徴的な方向がみられるようである。それは男性の奴隸的存在として遇されてきた女性が、徐々に近代的自我にめざめながら、人間的復権を求めようとする動きである。別のいいかたをすれば、封建的桎梏からの解放をめざす志向であり、象徴的な意味での「家」の重圧からの脱出を願う模索である。

それぞれの女性たちは、その生きた時代状況や社会環境によって、また身を置いた階層や生活の相によって、戦い方や抵抗の姿勢はさまざまであり、到り得たところも一様ではない。しかし、そこにはまた共通した性質もみられるのであり、いくつかの系列に分類してみることのできるのである。

第一の系列に属するものとして、遂に男性社会の奴隸的な存在として生涯を終らなければならない女性たちがある。これらの女性の中には、自我にめざめて近代性を獲得しようとして果せなかったものもあれば、それを自覚することなく終ったものもある。いずれにしてもその生涯は重く閉ざされたものであったことに変わりはない。近代文学の実質的な出発とされる森鷗外の「舞姫」のハエリスは前者であり、文学的に同じ榮譽を担う二葉亭四迷の「浮雲」のハオ勢は後者である。鷗外の「雁」

の△お玉▽は無意識ではあるが、深いところで自我のめざめといったようなものを予感したのであったかも知れない。この系列には樋口一葉の「十三夜」「にぎりえ」の△お関▽△お力▽や、徳富芦花の「不如帰」の△浪子▽、更には自然主義作家の田山花袋や島崎藤村のいくつかの作品の女主人公を数えることができる。特に藤村の「家」における△お種▽や「ある女の生涯」に登場する△おげん▽にその典型をみることができる。そして△お栄▽や△直子▽の「暗夜行路」を持つ志賀直哉を通過して、なお女性たちの苦悶は戦後までつづくのである。丹羽文雄の「厭がらせの年齢」の△うめ女▽や太宰治の「ヴィヨンの妻」「饗応夫人」の△私▽△奥さん▽に、それなりの女性の生きるかたちが見られるし、庄野潤三の「プールサイド小景」や「舞踏」には、新しい憲法によって崩壊し消失したはずの△家▽が依然として健在であり、△夫▽の所有物となることで幸福を自認する女性が息づいているのである。

右に挙げた女性たちが、一個の独立した人間としての尊厳を持ち得ず、封建性から脱出し得ないのは、一つには経済力を持たないことであり、その基礎となるべき職業が社会から拒絶されているということであろう。そして二つには政治権力が男性の手に握られており、参政権はおろか政治的な言動すら法によって禁じられていたことに原因がある。これは、社会の不平等を憤り改革を志すといった、いわば思想的な生き方をする道は閉ざされたことも意味している。三つには生理的肉体的な条件である。これは男性に比較して腕力や労働力において劣弱という力関係ばかりではなく、出産・育児という過重な労働を強いられることも意味している。それに加えて日常の家事労働は、肉体の疲労消

耗を限界状況にし、精神的な活動をする時間も氣力も奪うことになった。更に四つには、江戸時代以来の儒教的・女大学的モラルが支配していたからである。

こうした女性たちの典型は、近松門左衛門の浄瑠璃の世界に生きた女たちに、その原型をみることでできよう。封建的呪縛から脱するためには、 $\wedge$ 心中 $\vee$ か $\wedge$ 自殺 $\vee$ をして、 $\wedge$ 来世 $\vee$ に生きなければならなかったのである。

さて、こうした系列に位置づけられるべき女性の中には、封建的なモラルに反逆を企てようとするものがないわけではない。その情熱の源泉は人間的に生きたいという願望からであり、男性社会の代表者である $\wedge$ 夫 $\vee$ への反逆や裏切りというかたちをとり、封建性の象徴である $\wedge$ 家 $\vee$ の破壊というかたちをとる。大岡昇平の「武蔵野夫人」に登場する $\wedge$ 道子 $\vee$ と $\wedge$ 富子 $\vee$ の志向した生きかたにそれを見ることができよう。旧憲法時代には $\wedge$ 姦通 $\vee$ と呼ばれていた行為を敢てすることができたのは、戦後の新しい法律に姦通罪がなくなったことと無縁ではない。彼女たちは井上靖の「獅銃」の $\wedge$ 彩子 $\vee$ と同じであり、真に人間的に生命を燃焼し、社会的存在として現実に生きることなく、つまりは反逆し否定すべきモラルに屈服するか、殉じるしかないのである。

だが、こうした女性たちとは異なり、経済力を獲得することによって、男性社会の支配から脱しようとするものがある。この第二の系列に属する女性たちは、そのためには必然的に社会的に認められた職業の中に生きることになる。永井荷風の「つゆのあとさき」の $\wedge$ 君江 $\vee$ は女給として生き、谷崎潤一郎の「春琴抄」の春琴は琴の師匠として君臨し、伊藤整の「火の鳥」の $\wedge$ エミ $\vee$ は新劇女優とし

て主張する。娼婦もまた社会的に認められた職業である。特に戦後のいわゆる赤線に生きた娼婦は、樋口一葉の時代とは異なって自らの意志と誇りとで娼婦を職業とするのである。これは吉行淳之介の「原色の街」の△あけみ▽をみれば肯けることであるし、田村泰次郎の「肉体の門」に登場する女性たちの生き方をみれば、旧い秩序やモラルを苦もなく打ち破り、人間的な連帯を根ざす生き方をして、いることが理解できよう。これらの女性たちは、職業を持ち経済力を持つことによって、あるいは社会的に自己の存在を主張し、あるいは男性社会の呪縛を脱しようとしたものたちである。むろん、それは明瞭に意識されたものということではないにしても、方向としてそういうものである。

第三に考えられるのは、女性を奴隸的存在とさせ、△家▽の付属物とさせていた要素の一つである生理と肉体を逆手にとって、男性社会へ戦いを挑んだ女性たちの存在である。その顕著なものは、泉鏡花の「高野聖」にみられる△魔女▽であり、「刺青」「痴人の愛」に出版し、「瘋癲老人日記」にまで至った谷崎潤一郎の女性たちである。更には有島武郎の「或る女」の△葉子▽にその象徴的な生き方をみることができよう。やや視点をずらせば芥川龍之介の「好色」「藪の中」の△小侍従▽や△若い妻▽にも同じ傾向をみることができる。

これら第二、第三の系列の女性の生き方は、井原西鶴の「好色一代女」や「好色五人女」などの好色物に通じるものであり、上田秋成の「雨月物語」の世界にも通じるものであろう。

最後に、政治的な面に女権の獲得をめざした女性たちがいることに注目しなければならない。これは思想性や社会性を同時に持っていることを意味するが、近代日本に生きた女性たちにとっては、極

めて困難な道であったということが出来る。前述したような実質的な近代文学の誕生といわれる「舞姫」「浮雲」以前に、広津柳浪の「参政子蟹中棲」の八敏子Vが登場している。この二十歳前の美貌の女学士が八女子参政党Vの闘士として登場するのは明治十九年のことであるが、これは三年後の国会開設をにらんでの自由民権運動と無縁ではない。政治活動の一環として、政党の綱領の宣伝や啓蒙のために夥しい政治小説が書かれたが、末広鉄腸の「雪中梅」「花間鶯」の八お春Vとともに、八敏子Vは日本では珍しい政治女性として登場するのである。だが、実在の中島俊子や福田英子が政治意識にめざめて活動することとは裏腹に、その後の文学作品にはこの系列の女性は、宮本百合子の「伸子」「播州平野」の女主人公たち八伸子V八ひろ子Vまでついに登場することはなかったのである。石坂洋次郎の「若い人」の八スミ子Vや山本有三の「女の一生」の八充子Vに一つの生き方がみられるが、「こういふ女」の平林たい子や「キャラメル工場から」の佐多稲子の作品にも、政治活動や社会性のめざめをみることが出来る。また葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」の八女工Vにも同じ意識がみられるようである。しかし、時代と社会はこれらの女性たちに苦難の道を強い、その理想を十全に達成させることはなかった。旧帝国憲法を基盤とする体制が、政治権力を一部の支配階級に独占させ、一般大衆から政治を隔絶させたことと無縁ではない。そして治安警察法が苛酷に大衆を抑圧していたのである。そうした男性社会の状況の中にあって、その奴隸的存在であった女性は、戦後になってようやく選挙権を与えられたに過ぎなかった。文学が時代と社会とを越えることができない以上、この系列の女性が描かれなかったのは仕方がないことである。

私は大まかに四つの系列の中に女性像をとらえてみたのであるが、いうまでもなくこれは一つの角度からの切りこみであって、アプローチの方法は他にいくつも考えられよう。たとえば、戦後の吉行淳之介「闇の中の祝祭」や瀬戸内晴美「夏の終り」などにみられる女性たちにも、新しいタイプの一つがみられるのである。これらの女性たちは社会的な地位も知名度も、経済力も、むしろ男性よりまさっている。しかし、性のために苦悩し煩悶するのである。ここに女性の置かれたもう一つの位置をみることができるようである。それはそれとして、私の試みた方法に限ってみても、ここからはみ出した多くの類型が考えられる。時代と社会とを考える上で、たとえば戦争や地震や政治的社会的事件や世界恐慌などは無視できないだろう。日清戦争・日露戦争に関わりがあるとみられる観念小説の中の女性や、関東大震災後のモダニズム文学の中の女性や、第二次大戦後の混乱期に生きた女性についても触れなければならないはずである。

ここでは江戸元禄期の西鶴と近松を登場させたが、近代日本文学の中の女性たちと微妙に連なっているからであり、他の諸外国の文学作品に描かれた女性像と比較したとき、日本の特性をより明瞭に際立たせると思われたからである。

ここに取りあげた十六篇は必ずしも近代文学を代表させるのに十分とはゆかないが、与えられた頁数の制限もあり、いまは一応の責を果たすことにするのである。

井原西鶴『五人女』のお夏・おさん

井原西鶴（一六四二—一六九三）

江戸元禄期の人。浮世草子の創始者。「好色一代男」「好色一代女」「好色五人女」などの好色物で愛欲を、

「日本永代蔵」「世間胸算用」などの町人物で金銭欲を描き、モーパーッサンやメリメ以上のリズムと評価されている。武家物に「武家義理物語」「武道伝来記」、雑話物に「懷硯」「諸国噺」などがある。近代以降では露伴、紅葉、一葉、鴎外、花袋、白鳥、直哉、実篤、作之助、文雄、治などに影響を与えた。

「五人女」は、お夏（清十郎）お七（吉三郎）おまん（源五兵衛）の三人の処女と、おさん（茂右衛門）おせん（樽屋）の二人の人妻が描かれ、いずれも実在のモデルを作品化したものである。お夏とおさんにそれぞれ処女と人妻の性愛の典型をみることができ。

お夏は播州姫路の富商但馬屋九右衛門の妹で十六歳、都の遊女にも勝る美人で兄から縁談がもちこまれても、「男の色好みて」定まった縁がなかった。男をえりごのみし、保護者のすすめる縁談に耳をかさないお夏は、当時としては勇気のある新しいタイプの女性である。そのお夏は、とつぜん手代の和泉清十郎に「思ひつき」恋い焦れるようになる。そのきっかけは、仲居の亀という女が清十郎の巾広の帯を細めに仕立直しをしたとき、帯にくけこまれてあった二十余通の恋文である。その差出人はすべて別人であり、しかも男を知り盡しているはずの遊女であったことが、お夏の「色好み」を刺激したからである。美男である清十郎にそれまで無関心であったのに、この恋文によって「内証にしこなしのよき事」があるにちがいないと考えたことは、お夏の「色好み」が外形的な容姿ではなく、

男としての内面の心情の豊かさにあったということである。それも自分一人の判断でなく、客観的な裏づけを求めたことも注目されなければならない。

理想的な男性像を清十郎にみたお夏は、「魂身のうちを離れ」「盆も正月もわきまえず」目つきさえおかしくなるほどに恋い焦れ、人目も憚らずに恋文を送りつけた。清十郎の方でも「もやもやとなり」お夏と相思相愛の関係となったが、「人目せはしき家」でもあり、九右衛門夫婦の監視もあって、それ以上の「うまい事」まで二人の関係は進まなかった。手代と主筋の娘との恋は法度であり、同じ家においても二人は、「やうやう声を聞きあひけるを楽しみに」煩惱の火を「互ひに燃やし、両方恋にせめられ、次第やせに」瘦せこけながら、いつ成就するかもしれない恋に不安と焦りの日を送っていた。

但馬屋一家の女中衆は恒例の花見に清十郎を宰領としてでかけた。囲った幔幕の中では、「こなたには女酒盛、男とて清十郎ひとり、下々」の者もすべて茶碗酒をあおり、前後を忘れての乱痴気さわぎというとき、大道芸人の一行が獅子舞などの芸をにぎやかにはじめた。女中衆は酔いと好奇心で幕の外へ見物にでたが、お夏はとっさに「かかる時、早業の首尾もがなと氣のつく」頭の回転のはやさをみせた。これを逃しては、清十郎と契るチャンスは二度とあるまいと考えたのである。

お夏は「独り幕に残りて、虫歯のいたむなど、すこしなやむ風情」で「帯はしやらほどけ」に解けたのをわざとそのままにして、着がえの衣類を積みかさねた物蔭に、手枕をして眠ったふりをして待っているのである。そして同じ店の清十郎が人目をしのいで来たのを、「お夏まねきて、結髪のはど